

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二12:1～10 「弱さのうちに現れる恵み」

[1]「無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう」

パウロは人と比べてどれだけすばらしいかということしか眼中にないにせ教師たちに対抗し、またコリント教会の人々の目をさますために無益と知りつつ、自分の特別な体験を語っていく。

[2-3]「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。——第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、——それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです——」

「キリストにあるひとりの人」とはパウロ自身のこと。彼は自分の経験したことが傲慢に聞こえないようにこのような表現をしたのであろう。彼は自分の経験が事実であることを示すために十四年前と正確に時を記している。この時期は彼がシリアのアンテオケ教会にいた頃か、あるいは第一回伝道旅行の途中、小アジアのルステラで石打ちにされ、死にそうになった時のことかもしれない。彼は自分でもそれがどのようになされたのかわからない状態であったので、肉体のままか、あるいは肉体を離れて霊の状態であったのか知らないと言っている。「第三の天」とは天が三段重ねになっているわけではなく、聖書注解者によれば、神のそば近く、聖く完全で栄光に輝く所、すなわち天国のことと考えられている。

[4]「パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています」

パラダイスとは「楽園」という意味で「第三の天」の別の表現であろう。かつて、罪のためにパラダイスから追放された人間がキリストの贖いによって、それをもう一度回復し、キリストを信じた者は皆そこへ行くことができるのである。このようにパウロは天国の窓が開かれ、そこに引き上げられ、そこを垣間見るといって驚くべき経験をした。

[5-6]「このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。たとい私が誇りたいと思っても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見ることに、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけないからです」

いつの時代でも人は不思議な能力を持っていると思われる人物に引かれる。それゆえパウロは新しい教祖にされることを恐れて、誇ることを控え、かえって自分の弱さ以外には誇りませんと言う。あがめられるのは神だけでなければならないのである。

[7-8]「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました」

この肉体のとげとは様々な解釈があるが最も可能性のあるのは、彼が第一回伝道旅行の時にかけたマラリヤの後遺症ではないかと考えられる。それが間欠的に激しい症状を示し、彼を苦しめたという考えである。彼はこれを去らせてくださるようにと三度も主に願った。

[9]「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」

パウロの切なる願いに対して主の答えは否であった。そのとげを取り去るのではなく、そのとげに悩まされながら、生きていかなければならない弱さのうちに主の力が完全に現されるというのが答えであった。苦悩している心の中に神の力は働き、その苦痛を乗り越えさせてくださり、そこにおいて驚くべき神の恵みを味わうことができるのである。私たちは自分の弱さがキリストの力の現れる契機となることを覚えるならば、パウロのように「私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」と言うことができるようになるのである。

[10]「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」

これはパウロの結論である。これは負け犬のつぶやきではなく、実に勝利の歌なのである。私たちも与えられている苦難、困難があるならば、それをキリストの力が現される機会と覚え、感謝しつつ、信仰生活を全うしていきたい。